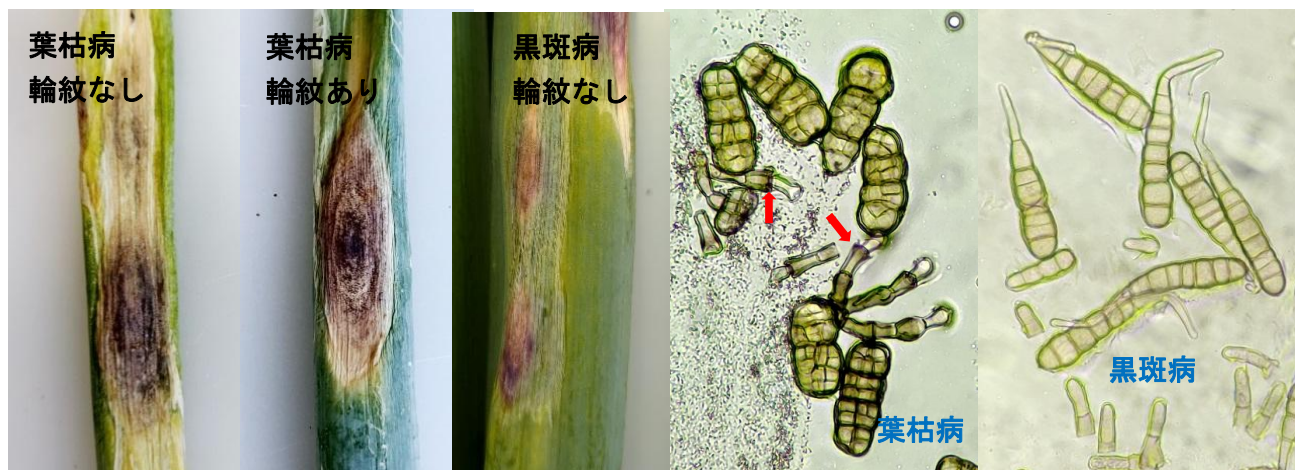


ネギ葉枯病の黄色斑紋症状

ネギ葉枯病の黄色斑紋症状が増加してきています。上位葉ほど症状が重くなるので、黒褐色楕円形病斑よりも実被害が大きくなります。黄色斑紋症状は9月下旬以降に発生が増加するとみられていましたが、6月にも奇形を伴う重症化が見られました。秋の発生時期を前に見分け方を示します。



ネギの葉枯病と黒斑病は、ともに葉や花茎に楕円形の病斑を形成し、黒褐色すす状のカビ（分生子）を生ずる病害です。葉枯病では病斑に輪紋がなく、黒斑病では輪紋がある、とされますが、葉枯病でも分生子形成の濃淡が輪紋に見えることがあり、黒斑病でも若い病斑では輪紋が見えません。このように葉枯病と黒斑病は肉眼での識別が難しいものの、顕微鏡を用いれば、分生子の形は、**葉枯病では俵型、黒斑病では長棍棒状**で、容易に識別できます。また葉枯病菌は分生子柄上に伸長痕として**カラー（襟）状の構造**が残ります（**赤矢印**）。黒斑病菌の分生子柄にはこの構造が無いので、**カラー**があれば葉枯病菌です。しかし、このカラーも分生子柄の伸長が無い場合は形成されません。



6月の症状です。黄色斑紋症状は上位葉ほど重症になり、中心葉は黄化して、株全体が屈曲した奇形になっていました。実体顕微鏡で観察すると、斑紋部分に付着する分生子が黒く見えます。セロハンテープで移しとって顕微鏡観察すると、分生子柄はなく、分生子はここで形成されたのではなく、飛散してきたものと分かります。分生子は発芽して旺盛に菌糸を伸ばしていました。

今発生しているものが葉枯病か黒斑病か見極めたうえで早めの対策をとるようにしてください。